

長野県立歴史館たより

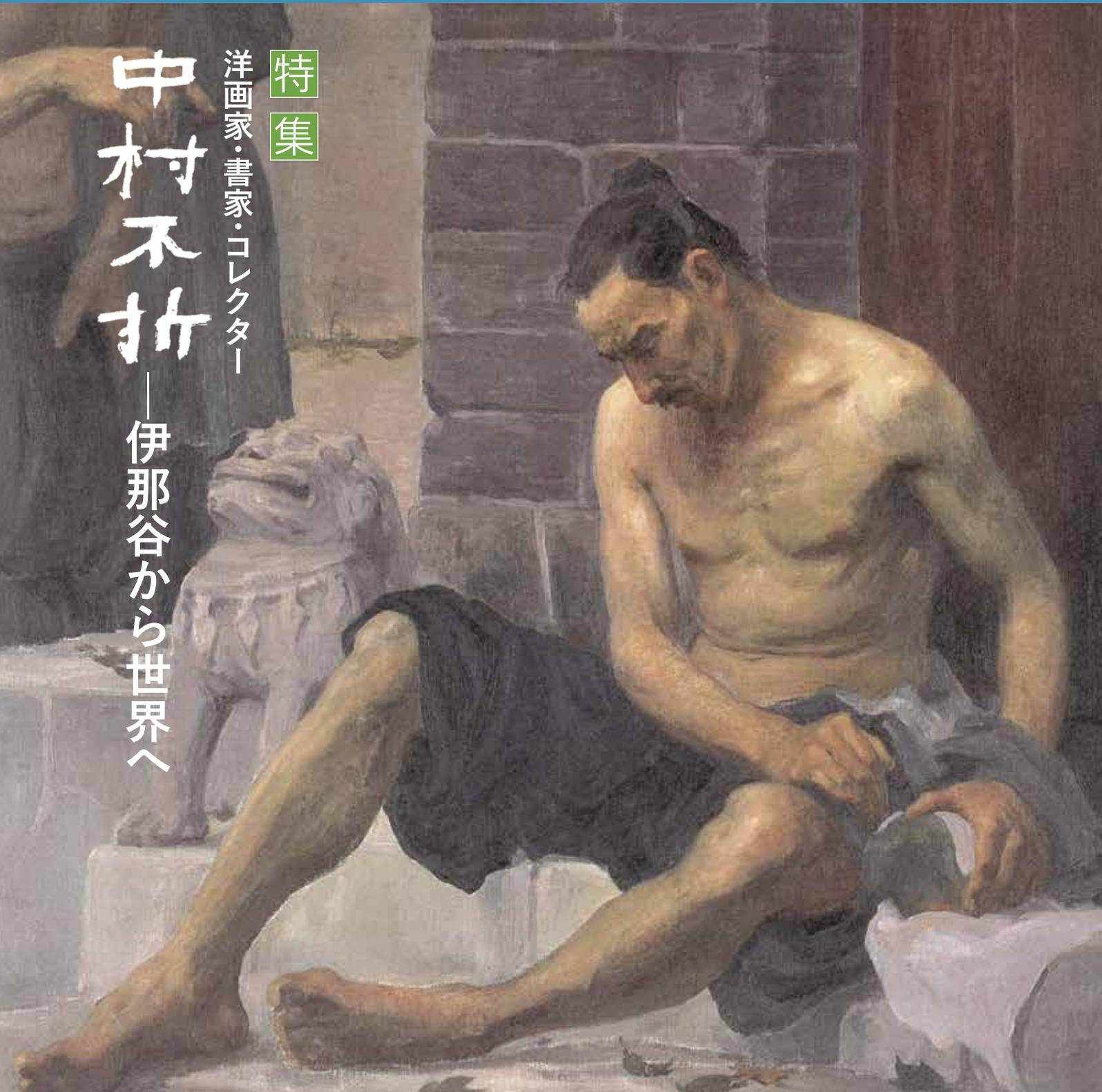
2020年 冬号 vol.105

特集

洋画家・書家・コレクター

中村不折

— 伊那谷から世界へ —



冬季展

洋画家・書家・コレクター

中村不折 —伊那谷から世界へ—

当館では、平成29年度より冬季の企画として、長野県ゆかりの人物に焦点を当てた展覧会を開催しています。これまで、飯田生まれの「博物館の父」田中芳男（1838-1916）、安曇野市ゆかりの写真家・田淵行男（1905-1989）を独自の視点から紹介しました。

今年度は、令和3年の新年最初の企画展として、伊那市ゆかりの洋画家で書家としても活躍した中村不折（なかむらふせつ、1866-1943）の世界をご覧ください。

江戸で生まれ伊那谷で育つ

中村不折は、幕末の江戸に生まれ、現在の伊那市で育ちました。中南信各地を転々とする生活の中、貧困と闘いながら苦学して画家を志し、1888（明治21）年、念願の上京を果たします。画塾「不^ふ同^{どう}舎」に入塾した不折は、小山正太郎・浅井忠ら明治美術の先駆者に師事することができました。



憐れむべし自宅の写生
1893(明治26)年 台東区立書道博物館蔵

日本新聞社と正岡子規 —新聞挿絵の先駆者

1894（明治27）年春、不折に大きな転機が訪れます。この時、家庭向けの新しい新聞『小日本』が創刊され、編集主任に正岡子規が就きました。子規は、新聞に絵画を掲載することを発案、画家として採用されたのが不折でした。やがて、不折と子規は無二の親友となり、洋画と文学という分野の枠を超えて互いに影響を与えあう仲間となります。また、以後不折の作品は子規の尽力で、『小日本』、『日本』に次々と掲載され、不折

に安定した収入をもたらしました。

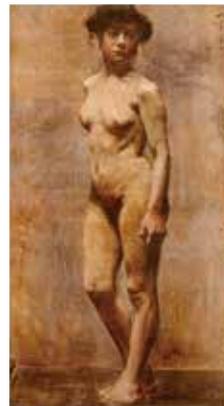


「水戸弘道館」『小日本』1894(明治27)年3月7日 日本新聞博物館蔵

パリへ —画学生にして新聞記者

その後は画家として順調な活躍を続け、1901（明治34）年には独力でフランスに渡り、西洋美術の本場への留学を果たします。不折が主に学んだのは、パリで最大の画塾アカデミー・ジュリアンというところで、ここで歴史画の巨匠ジャン＝ポール・ローランスに師事して人物画の基礎を徹底的に研究しました。

いっぽう、新聞『日本』の挿絵の仕事は継続し、授業の合間にはパリを中心に各地を精力的に取材してまわり、作品は定期的に『日本』の紙面を飾りました。つまり不折は、洋画を学ぶ留学生であると同時に、新聞社の特派員として働くプロの画家でもありました。



裸婦習作
1903~04(明治36~37)年



老人坐像
1903~04(明治36~37)年
(2点とも)台東区立書道博物館蔵

「歴史画」を専門とする洋画家となる

1905（明治38）年春、帰国した不折は、創立

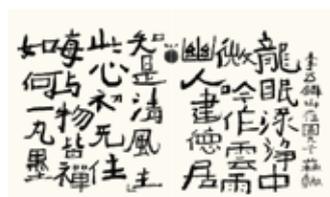
間もない美術団体「太平洋画会」に参加し、以後太平洋画会展覧会には毎回出品を続けました。さらに、1907（明治40）年に「文部省美術展覧会」（文展）が創設されると第1回展から審査員をつとめ、1919（大正8）年には帝国美術院会員に任命されるなど、洋画界での順調な活躍が続きます。

不折の油彩画は、神話や歴史上の事件を描く「歴史画」という分野で、特に好んだのが「中国故事」でした。書道研究を通じて蓄積された深い教養、パリ留学で鍛えられた人体表現、そして堅固な画面構成などが見所です。



煨芋不答宣使（いもをうづめやきてせんしにこたへず）
1928(昭和3)年頃 信州高遠美術館蔵

書家として一人気を博した「六朝書」



『龍眠帖』
1908(明治41)年 台東区立書道博物館蔵

不折の創作は幅広く、洋画家・新聞挿絵画家としてだけでなく、書家としての活躍も見逃せません。不折は1908（明治41）年に出版した『龍眠帖』を皮切りに、洋画制作と並行して「不折流」^{りくちよう}「六朝書」などと称された独自の書法を確立、書道界を越えて幅広い人気を博しました。

書道資料のコレクションと書道博物館

さらに、書道資料の蒐集^{しゅうしゅう}（コレクション）にも力を入れ、晩年の1936（昭和11）年にはそれら

資料を収蔵公開する「財団法人書道博物館」（現在の台東区立書道博物館の前身）を創設しました。

不折が蒐集した資料は、殷時代の甲骨文から、青銅器、石経^{せつけい}などの「金石文」、古写経、拓本類、近代日本の書跡まで、約16,000点に及びます。



西周後期 青銅 台東区立書道博物館蔵



織田信長 沢与介宛朱印状（部分）
台東区立書道博物館蔵

本展では、多分野にわたり活躍した不折の足跡を、厳選した作品・資料によってたどります。加えて、書道史上の至宝ともいえる不折コレクションを北信では初めて紹介いたします。信州に育ち、やがて世界を見据えた表現者・蒐集家^{コレクター}となった中村不折を再評価する契機となれば幸いです。

（林 誠）

Information

会期 ● 令和3(2021)年1月9日(土)～2月21日(日)

開館時間 ● 午前9時～午後4時

休館日 ● 1/12(火)、18(月)、25(月)、2/1(月)、8(月)、12(金)、15(日)

観覧料 ● 企画展のみ300円（大学生150円）

* 高校生以下無料。講座聴講は常設展観覧料が必要

丸田恒雄教諭が描いた
満州更級郷開拓団の営み

1932（昭和7）年に日本の傀儡国である満州国が建国されました。その後、終戦までに国策に従い、約27万人もの日本人が満蒙開拓団として満州へ渡っています。特に長野県は全国一の3万数千人を送出しており、他県を大きく引き離しています。

更級郡は1939（昭和14）年に郡町村会が満州更級郷の送出を決定し、1940（昭和15）年2月にソ連との国境近く東安省宝清県尖山に開拓団が入植し、開拓村の建設をはじめます。更級郡は郡当局や教育関係者による移植民奨励が活発な地域でした。そうした中にある県立更級農業学校は、「県立拓殖学校」設立を求める信濃教育会の要望をうけた県の指導のもと1936（昭和11）年に「長野県更級農業拓殖学校」と改称、拓殖科を新設します。その後も満州建設勤労奉仕隊の送出、青少年義勇軍拓務訓練講習会の実施等、全県的な拓殖教育の中心機関として、「満州移民」を推進していきます。

丸田恒雄氏は1919（大正8）年に更級農学校を卒業し、上田の日本農民美術研究所で山本鼎や倉田白羊らに木彫や絵画等を学んだ後、農家の工作技術の必要性を感じ、長野工業学校の家具科・建築科の夜学などに通っています。母校更級農学校から教師として招かれたあとは、美術と木工を教えながら、農具の修理もできない農民では困ると主張し、「農業工学」という新科目で地域の人材の育成、地域生活の向上に多大な貢献をしました。

その丸田氏は、母校の拓殖教育の一環として、1937（昭和12）年7月に満州視察、同年12月には満州信濃村へ出張し、木工・金工指導をしています。また、1940（昭和15）年6月22日から同年9月3日まで満州更級村開拓応援作業班として本科3年生15名を引率しています。次のスケッチはその時に描いた満州更級郷の景観です。入植

地である宝清県尖山にある尖山橋周辺を鶴が飛び交う風景が描かれています。



遠くに住居を望む尖山橋と鶴のスケッチ（当館蔵）

満州滞在中、丸田氏は様ざまなものを実に細かく描きました。日章旗と満州国旗がはためく村、洗濯物が干された住居、農耕の様子、生活用品や周囲の動植物…。そこには故郷を離れ、新たに歩み出した更級郷開拓団の姿がありました。

しかし、丸田氏の渡満からわずか5年後の1945（昭和20）年8月9日ソ連が満州に侵攻し、更級郷開拓団は悲劇的な結末を迎えます。生きて郷土に戻れたのは出征者を除く当時の在団者の約5%でした。

現在、丸田氏のご子息により当館に寄贈された全61点の丸田恒雄満州更級郷絵画資料は、展示替えをしながら年間を通して常設展示室で公開し、満州更級郷の確かな営みを今に伝えています。戦後75年目の今年は本来であれば戦争の犠牲者を悼み、平和への気持ちを新たにす節目の年であるはずですが、コロナ禍で多くの慰霊祭、追悼法要、関係する学習会などが中止となりました。県内の元開拓団員の方の高齢化も進んでいます。私たちはどのように満蒙開拓という史実と向き合い、何を学ぶべきなのか、令和の新時代、平和を求め続ける姿勢が問われています。

（大森昭智）

石庖丁はどのように使われたのか

さまざまな弥生時代の「石庖丁」

弥生時代の収穫具とされる「石庖丁」には、時期や地域によってさまざまな形や大きさのものがあります。教科書で見かける磨製の石庖丁のほか、横長の石の破片を加工して、側面に紐をかけるための袢（えぐ）をいれた打製の石庖丁や、破片のままの状態にほとんど手を加えない横刃形石器があります。

長野県では、磨製石庖丁に形の異なるものがあり、紐をとおすための孔が2つのものと1つのものに分けることができます。前者は長さ15cmを超える大形のものが多く、北信を中心に弥生時代中期（約2,200年前）の遺跡で多数出土していますが、後期（約2,000年前）以降はその姿を消してしまいます。また後者はやはり中期に出現し南信を中心に出土しますが、後期以降南信のほか、東信の上田・坂城地域で出土数が増加する特徴があります。弥生後期には群馬県などでも1つ孔の磨製石庖丁が出土します。長野県のもは長さ10cm程の四角い形をした、手のひらに握りこめる大きさのものが多く（写真1-②）。

磨製石庖丁の使用痕を観察する

当館で所蔵あるいは借用し常設展示している磨製石庖丁を、光学顕微鏡を用いて観察すると次のような使用痕（＝石器使用時に生じる傷跡や形状の変化）が確認できます。

長野市松原遺跡（弥生時代中期）の2つ孔磨製石庖丁には、刃の部分から本体中央部にかけて、テカテカとした微細な丸い平坦面が認められる箇所があります。これはイネ科植物が接触すること

で石器表面の凹凸や鉋物が摩耗し「光沢面」が形成されたため、穂摘みなどの作業によるものと想定されます。

一方、同じく弥生時代中期の長野市榎田遺跡の1つ孔磨製石庖丁（写真1-①）は、光沢面があまり発達していません。松原例よりもさらに小さく、アメーバのように不定形のテカテカした部分が、点在しています。

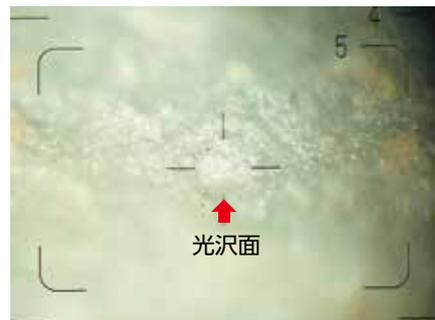
さらに、飯田市恒川遺跡群出土の1つ孔の磨製石庖丁は、刃の片側がすり減っていて（写真1-②矢印部）この部分が集中して使われたと考えられますが、光沢面はあまり発達していません。ただし、刃の縁に沿うように、非常に微細ですが鈍く光る部分が、線状に並んでいる様子が確認できています（写真2）。

石庖丁はどのように使われたのか

こうした使用痕の違いは何に起因するのでしょうか。使用回数の差であるとも指摘されていますが、使用痕の違いを、石器の使い方や対象物の違いと仮定すれば、収穫具の中で1つ孔と2つ孔の磨製石庖丁は異なった用いられ方（例えば穂摘みか押し切りによる除草や根刈りか、など）をした可能性も考えられます。

こうした謎の解明には、木・貝といった別素材の「庖丁」類、石器のなかで磨製石庖丁よりも出土数が多い打製石庖丁や、石片を利用した「刃器」など含めて、使用の痕跡を観察し、道具利用の多様性を検討する必要があります。

（杉木有紗）



信州に到達した石斧

～柱状片刃石斧～

弥生時代の石斧は、伐採斧（両刃）の大型蛤刃石斧、加工斧（片刃）の柱状片刃石斧、「小型方柱状片刃石斧」、扁平片刃石斧に分けて考えられています（佐原1985）。いずれも大陸伝来の磨製石器で、日本列島に到来した後、大型蛤刃石斧のように列島内で改良され、固有に発達を遂げた石斧もあります。

長野県には、火成岩（深成岩）を用いた大型蛤刃石斧と扁平片刃石斧の一大生産地が確認されていますが、柱状片刃石斧については、製作地はもちろん、その存在すら希薄です。学史をたどると、昭和31年の『信濃考古総覧』下巻に4点の出土地が図示されていますが、中でも箕輪町箕輪御室田出土例が典型例だと八幡一郎氏（1966）は指摘しています。今日、資料の所在等が確認できる確かな1例でもあります。緑色を呈した火成岩でつくられています。

近年、発掘調査で確認された柱状片刃石斧が県内に2点あります。箕輪例を含め、3点を観察してみると、個々の特徴に違いが認められます。

一般に柱状片刃石斧は、後主面側に抉りを設けた有抉（抉入石斧）とそれのない無抉に分けて考えられています。後主面とは、石斧を膝柄に装着した時に、使用者側（前主面）の反対側にあたる部分を指します。柱状片刃石斧の分類は、盧熾眞氏（1981.1983）や篠遠喜彦氏（1982）が形態

（全体形・断面形）や部分名称を日本に紹介し、体系的な論究は下條信行氏によりまとめられました。下條氏は形態的特徴を6つの型式（A～F）に類別し、出現順序をA型式→B→C→D、そしてE、F型式と整理し、型式の時間的位置と評価を行いました。その内容は、A型式は弥生時代前期初頭に属し朝鮮半島の影響を受けているが、日本的な変容（固有の変化）が認められる。B型式は前期に属し、東北部九州から西部瀬戸内まで広がる。CとD型式は前期末から中期初頭に関西から東海、北陸地方に分布する。特に東北部九州の系譜をひく本型式は、日本海沿いに山陰から北陸ま

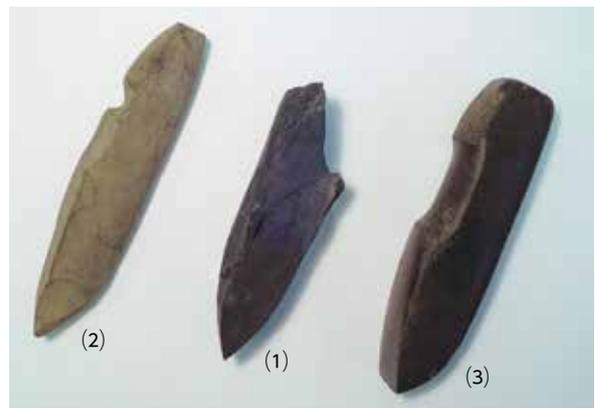
で分布を広げる。EとF型式は中期以降にあたり、九州での消失化、瀬戸内から関西にかけての登場、決りのない形態の出現がある、としています。

長野県の柱状片刃石斧3点は、箕輪御室田例(3)がF型式に相当し、長野市檀田遺跡例(2)はC型式に、千曲市屋代遺跡群例(1)は基部が欠損して全体形は不明ですが、C型式もしくはE型式と考えられます。(3)は採集品で時期の判断は難しいのですが、形態的特徴から中期後半とみてよいでしょう。他の2例は弥生時代中期中葉に所属し、(1)は厚みのある黒色頁岩材で、刃先の片減り具合から片刃縦斧の可能性も考えられます。(2)は火成岩製とみられる石材で細身・長身、C型式の特徴をよく示し、刃こぼれが後主面側にみられます。同遺跡からは、同じ火成岩材が他に出土していないことから、搬入品の可能性が高いと考えられます。下條氏の指摘する日本海側の出土地で、最も長野県に近い石川県よりも西に出自が求められそうです。

長野県の弥生時代中期中葉は、大型蛤刃石斧、磨製石庖丁など大陸系磨製石器の登場期にあたります。これらの石器が、どのような経路で本県に伝播したか、それを考察する一助となるのが、柱状片刃石斧と考えられます。（町田勝則）

文 献

- 1982年 篠遠喜彦「石器－手斧ポリネシア遺物控」
えとす第17号
1966年 八幡一郎「抉入石斧を巡る諸問題」信濃第18巻第8号
1983年 盧熾眞「有溝石斧遺跡の性格考察」翰林大学
1985年 佐原眞「3工具」『弥生文化の研究』



(1)当館蔵 (2)長野市教育委員会蔵 (3)箕輪町教育委員会蔵

箸の橋渡し — 千曲市東條遺跡出土の保存処理木器 —

保存処理をすすめている木製品の中に、千曲市東條遺跡から出土した中世の木製品があります。

東條遺跡は、千曲川西岸で、千曲市武水別神社から南に続く一本松街道の南約800mの場所で「姨捨の棚田」の間にあります。

発掘調査によって、古墳時代後期～戦国時代（16世紀末頃）まで存続したことがわかっています。中世（鎌倉時代～戦国時代）にかけての時期では、地面に穴を掘って柱を立てる掘立柱建物跡、平たい石を置いてその上に柱を立てる礎石建物跡、地面を方形に掘って壁際に石を積み上げて基礎を築く方形建物跡（貯蔵施設や倉庫の用途も想定）と井戸跡等から日用・非日用の木製品が豊富に出土しています。神社の前の町屋的な集落の様相が浮き彫りとなり注目されています。遺跡からはこの時期の貴重な木製品が5585点と大量に発見されました。

その中で漆器は、12世紀以降に出現し安価となる渋下地（素地に柿渋を塗って下塗りとしたもの）の普及品が多い傾向にはあります。写真のものは黒地に赤漆で鶴が描かれています。他にも松林、菊など趣のある紋様が描かれていて、当時の人びとがどのような場面で、どのような気持ちでこの漆器を使ったのかと惹きつけられる美しさです。

また、日用の食事具として欠かせない箸等も1359点出土しました。明確に箸として認定できるのは882点です。



鶴丸紋の漆器（当館蔵）

箸が194点出土した14世紀代の井戸跡（SK1123）（註）では、井戸の水留からかわらけや板材が出土し、中からは祭祀具の刀子形の形代、棒状のものを立てたような祭祀具と思われるものなどが見つかりました。報告では、井戸の祭祀の可能性を指摘しています。

保存処理を進める中で、箸の形状も観察しました。観察表から194点の形状の内訳をみると、両端を残しているものが49点、尖った形状を残しているものが13点で、残りは欠損した棒状をなしている132点となっています。

長さ約18～22cmの両端を削り出した箸を観察すると、全体が平坦な形状（断面方形）と断面全体が丸みを帯びるよう削り出したものがありました。これらの箸の形状は、現在、お正月、婚礼、お食い初めの際に使われる、いわゆる「両口箸」あるいは「祝い箸」の箸形状とも類似しています。しかし、出土した箸からは、すぐ折れてしまいそうな印象を受けました。



井戸跡（SK1123）
出土品
箸（上）・
祭祀具（下）（当館蔵）

井戸はこの世と異世界を結ぶ場所ともいわれています。非実用的とも思われる箸に類似するモノで祭祀に関わったものがあるかと調査したところ、次のような神事がありました。

京都市下鴨神社の立秋の前夜に、みたらし池の中央に50本の斎串（矢のように見える棒の上に幣をつける）を穴が空けられた木に立てて、それを裸の男が奪い合うという、“矢取りの神事”です。このような事例も含めてみると、東條遺跡の井戸から出土した棒状のものを立てたような祭祀具（形代？）とされた木製品や大量に出土した箸の中には、実は斎串で、用途が未確定の木製品は、下鴨神社のように斎串を立てた装置ではないかとも思えます。さらに多くの検証を必要としますが、従来、箸とされているものを出土位置や形状等を含め、さまざまな視点から見ることも必要と思われます。

東條遺跡の箸を含めた木製品も、漆器を除きPEG含浸法による保存処理をすすめ、展示前には表面のPEGをアルコールによって拭き取り欠損部を樹脂で補ってから古色仕上げを行うことで、使用時の色と質感が蘇ります。中世社会の人びとの想いを「展示」し、現代に伝える「架け橋」になるようにすすめています。（近藤尚義）

（註）方形の組板と曲物と石組を組み合わせており、他の井戸と異なる。

参考文献 2013 岡村秀雄・町田勝則他 『千曲市その3-東條遺跡ほか《本文編》』長野県埋蔵文化財センター



■2020(令和2)年度 12月～3月の行事予定

12月

休館日
7・14
21・
28～31

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、展示・講座・イベント等は、状況により変更、延期、あるいは中止とさせていただきます。

講座・イベント

近世史セミナー

12/5(土) 13:00～15:40
研究テーマ「古文書を守る」
研究発表「小諸市古文書調査室の取り組み」
(信濃史学会会員 市川包雄氏)
講演「『ウィズ・コロナ』社会の地域歴史資料保全」
(国文学研究資料館准教授 西村慎太郎氏)
(総合情報課) ※事前申込制 40名限定

Goolightの日(無料開放日)

12/20(日)
収蔵史料 特別公開
4K番組上映(「土偶」等)ほか

特設考古学講座

1/30(土) 13:30～
「土器に残された“食”の痕跡
～土器圧痕レプリカをとってみよう～」
(考古資料課) ※事前申込制 20名限定

県立歴史館の信州学講座

第4回 1/16(土) 13:30～
「学び続ける信州人でありたい」
(総合情報課 畔上不二男)

第5回 2/20(土) 13:30～
「長寿県への道のり」
(総合情報課 加藤廣美)

第6回 3/6(土) 13:30～
「上田から見る戎の満水」
(上田市立博物館 高野美佳氏)

「県立歴史館の信州学講座」は定員80名、当館講堂で行います。HP等による事前申し込み制です。聴講には常設展示観覧料(一般300円、高校生以下無料)が必要です。

1月

休館日
1～4
12・18
25

冬季展

「洋画家・書家・コレクター
中村不折
—伊那谷から世界へ—

1/9(土)～2/21(日)

講演会

1/23(土) 13:30～
「中村不折の書画とコレクション
～書道博物館所蔵品から～」
(台東区立書道博物館主任研究員 鍋島裕子氏)

講座

2/6(土) 13:30～
「画家・中村不折の生涯と芸術」
(当館学芸員)

講座・講演会会場：当館講堂
定員：80名(事前申込制)

2月

休館日
1・8
12・15
22・
24～26



ちょうせんひ
張遷碑(後漢・中平3年
台東区立書道博物館蔵)

3月

休館日
1・8
15・22
29

2021年春季展

「県立歴史館の名品」
—絵画・工芸を中心に—

3/13(土)～6/13(日)

表紙の写真の解説

べんか たま

卞和璞を抱いて泣く

1914(大正3)年 油彩 信州高遠美術館蔵

春秋時代の楚の卞和は、山中で玉璞を得て厲王に献上したところ、ただの石であるとされ、誑かしの罰として左足を削られた。武王の代になって再び献上したが、同じ結果となり、今度は右足を削られた。次いで即位した文王が玉人に琢かせたところ、果たして宝玉を得たという故事。不折の作品に描かれるのは、宝石を「石」とされ、正しい行いに対して「誑」の汚名を着せられたことを嘆いて泣く卞和その人である。第8回文展出品。

行事アルバム

歴史館で夏休み



8月2日(日)、歴史館で夏休みへ138名の皆様にご来館いただきました。今年は新型コロナウイルス感染防止に配慮をしたイベントとして「お宝発見大作戦!」を実施しましたが、ミッションカードをもとに展示室内を行ったり来たりして、お宝探しに夢中になる子どもたちで賑わいました。

新潟県立歴史博物館と連携協定を結びました!



10月27日(火)に新潟県立歴史博物館と、共同研究、収蔵史資料の相互貸借、文化財保護に向けた連携等のための協定を結びました。

考古学講座



10月31日(土)に今年度初の考古学講座「稲作と社会の変化～共同体の発達を考える～」を実施しました。秋季企画展「稲作とクニの誕生—信州と北部九州—」が開催中だったこともあり、信州における道具の分布や流通と、共同体の発達との関係について深く考えさせられる内容でした。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.105

2020(令和2)年12月3日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/